



	2025-33
監督: ジョン・M・チュウ	
原作: 「ウィキッド-誰も知らない、もう一つのオズの物語」グレゴリー・マグワイア著 (早川書房刊)	
出演: シンシア・エリヴォ/アリアナ・グランデ/ジョナサン・ペイリー/イーサン・スレイター/ボーウェン・ヤン/ピーター・ディンクレイジ/ミシェル・ヨー/ジェフ・ゴールドブラム	

👁️👁️ みどころ

ブロードウェイ発で、劇団四季でも大人気のミュージカルは、“ミュージカル大好き人間”の私には必見！一方でそう思いつつ、他方で、魔法使いを主人公にした“お子ちゃま向けミュージカル”はもう飽きた感も・・・。

そんな思いで劇場に行ったが、本作の鑑賞は大正解！こりゃ傑作だ！後に“悪い魔女”に成長する、松田聖子ばりの“ぶりっ子”グリンダのキラキラお嬢様ぶりと、後に“善い魔女”に成長する、みんなから忌み嫌われ続けてきた“緑色の女の子”エルファバの対比はお見事だ。

興味深いのは、魔法の原理が怒りや念力にあることが明示される(?)こと。そのことが、古代の呪文を収めた書物の「グリムリー」のインチキ性と、オズを統治し、最も偉大で恐れられる存在の「オズの魔法使い」のインチキ性が暴露される後半のストーリーの面白さと

“説得力”につながっていくから、なるほど、なるほど・・・。

箒に乗った魔女が空を飛ぶシーンは、某保険会社のコマーシャルでおなじみだが、そんなシーンはいつ、どんなストーリー展開の中で生まれるの？近い将来公開される「パートⅡ」への期待につなげたい。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

■□■迷った挙句に鑑賞！それが大正解！こりゃ大傑作！■□■

“ミュージカル大好き人間”の私は、ブロードウェイ・ミュージカル『ウィキッド』が2003年の初演以来大人気となり、劇団四季でも2007年から上演していることをよく知っていた。また、同作の原作になったのは、グレゴリー・マグワイアが1995年に発表した小説『ウィキッド』（1995年）であることも知っていた。さらに、映画検定3級の資格を持つ私は、ジュディ・ガーランド主演のMGM映画『オズの魔法使い』（1939年）のことや、

その主題歌が『虹の彼方に（Over the Rainbow）』であることも知っていた。

他方、その1939年の映画の原作が、ライマン・フランク・ボームの小説『オズの魔法使い』（1900年）であったことまでは知らなかった。また、ブロードウェイ・ミュージカルの原作がグレゴリー・マグワイアが1995年に発表した小説『ウィキッド』（1995年）であることも知らなかった。湾岸戦争に触発され書いたと言われているこの小説は、正義やファシズムについて問いかける大河物語で、ざっくり言えば、『オズの魔法使い』の前日譚と裏話らしい。

第97回アカデミー賞作品賞、主演女優賞、助演女優賞、視覚効果賞、編集賞、作曲賞、音響賞、衣装デザイン賞、美術賞、メイクアップ&ヘアスタイリング賞の10部門にノミネートされた本作の宣伝力はすごいし、“善い魔女” グリンダ（アリアナ・グランデ）と“悪い魔女” エルフアバ（シンシア・エリヴォ）の対比がわかりやすく、かつ面白いから、本作は当然鑑賞すべき！一方でそう思いつつ、他方で「子供だましのおとぎ話はもう飽きた」との思いもあって、劇場行きを迷っていたが、「これは必見！」と考えていた『教皇選挙』と抱き合わせで本作を鑑賞することに。しかして、それは大正解！こりゃ大傑作！

■□■冒頭の喜びはナニ？緑色の女の子の誕生は？入学式は？■□■

本作は、ミュージカル映画らしく、いきなり、魔法と幻想の国オズで、人々が今、“悪い魔女”の死を喜び祝っているシークエンスから始まる。そこにやってきた“善い魔女” グリンダが改めて悪い魔女エルファバの死を告げると、人々の歓喜の声はさらに高まっていくことに。しかし、いくら悪い魔女だとしてもその死をみんなで喜ぶとは一体どういうこと！？

かつてのアイドル歌手松田聖子はしっかりした歌唱力を備えた歌手だったが、お嬢サマスタイルが影響したのか、一方で“ぶりっ子”との批判を受けた。松田聖子の後に登場したアイドル歌手・中森明菜は、その逆に“自立した女”をうまく演出したが、さてあなたは、松田聖子派？それとも中森明菜派？オズの人々とともに、“悪い魔女”の死を喜んでいたグリンダは、その服装からみても、言動からみても、明らかに松田聖子派！というより、かつての松田聖子そのものだ！そんな“善い魔女”グリンダは、一人の女性から「悪い魔女と友達だったのでは？」と尋ねられると、おもむろに死んだ魔女の身の上を語り始めることに。

黒人差別が有名なアメリカでは、小説『アンクル・トムの小屋』（1852年）が有名だが、エルファバの肌は、緑色だったから、生まれた時から黒人差別以上の激しい差別を受けていたらしい。そのため、母親が見知らぬ男との情事の果てに生んだ娘エルファバを、父親は忌み嫌っていつていたらしい。その上、エルファバの次に生まれた妹のネッサローズ（マリッサ・ボーディ）は足に障害を持っており、車椅子生活を余儀なくされていた。そんなネッサローズを父親が可愛がってくれたのはネッサローズにとって幸いだったが、姉妹でのここまでの差別は、エルファバにとってさらに厳しい境遇になったことは明かだ。

そんなエルファバもネッサローズも、今や成人に。そして今日は、オズの最高学府の魔法大学であるシズ大学への入学を許されたグリンドとネッサローズの晴れの入学式だ。そのため、入学の喜びでいっぱいグリンドとネッサローズ、そしてまたネッサローズの付き添いとしてやってきたエルファバたちが、両親たちを含めて入学式場で初めて出会うことに。

■エルファバも一緒に入学！隠れた才能は？その発見は？■

毎年3月末は年度末だから、国会では予算案の成立が不可欠だし、大学では卒業式のシーズンだ。それに対して4月1日以降になると、大学では入学式のシーズンだが、本作に見るシズ大学の入学式のシーンは魔法大学という架空の大学の入学式だけに興味深い。どんな試験に合格したことによって、ネッサローズとグリンドがシズ大学に入学できたのかは知らないが、オズの最高学府たるシズ大学に入学を許された2人が喜びいっぱいで入学式に臨んだのは当然だ。

それに対して、エルファバは車椅子の妹ネッサローズの世話をすることを父親から厳命されたため付き添っていただけだが、エルファバが“緑の女の子”とみんなから揶揄されるシーンの中で、エルファバが見せた思いがけない魔法の力をシズ大学の魔法学の権威であるマダム・モリブル先生（ミシェル・ヨー）が目撃することになるので、それに注目。このシークエンスを見ていると、魔法とは怒りや念力の一種（延長）であることがよくわかる。したがって、“緑色の女の子”と蔑まされ続けてきたエルファバの怒りがそのまま彼女の魔法を生み出しているというストーリー構成は説得力がある。マダム・モリブル先生はそんな修行を積むことによって魔法学の権威になっていたわけだから、“緑の女の子”に生まれたことによって子供の頃からそんな才能を培ってきたエルファバの魔法の才能を彼女が発見したのは当然だ。その結果、エルファバは妹のネッサローズとともにシズ大学への入学を許可されたが、エルファバはそれを受け入れるの？また、エルファバの父親はそれを許可するの？

■最悪の寮友から親友に！それはなぜ？それが本作のキモ■

大学時代を親元から離れたアパート住まいで自由気ままに過ごした私は、1972年4月に司法修習生になると、1年目の最初の4か月と2年目の最後の4か月は東京の湯島にあった司法研修所に通うべく千葉県の松戸寮に入った。寮生活は初めてだったが、すべて個室だったため、そこでも自由を満喫することができたが、本作のシズ大学はすべて二人部屋らしい。また、シズ大学では入学式の当日、入所者の部屋割りは既に発表されていたが、突如、“緑色の女の子”エルファバが入学することになったため、急遽エルファバのルームメイトを決めなければならないことに。しかし、ついさっきまでみんなから白い目で見られていたエルファバとの同室を希望する入学生はいいるの？それがいなければエルファバは例外的に一人部屋に？そう思っていると、なんとキラキラドレスで入学式に参加し、エルファバが持つ隠れた魔法の力に興味を示したマダム・モリブル先生に早速媚びを売り、取

り入ろうとしていたグリンダが同室を希望したからビックリ。グリンダのその狙いは一体何？

私はスクリーン上に見るシズ大学の女子寮の広さに驚いたが、それ以上に驚いたのは、部屋割りをすべてグリンダが独断で決めてしまったこと。公平に2分の1の広さにするのが当然だが、グリンダの仕切りは？そんなストーリー展開の中、一方でエルファバの隠れた才能が少しずつキラリ、キラリと光り始めると共に、他方でグリンダの松田聖子ばりの“ぶりっ子ぶり”が、少なくとも私とマダム・モリブル先生には明らかになっていく。もっとも、そこで偉いのは、“ぶりっ子”とはいえ、松田聖子がそれなりの才能とそれなりの努力でアイドルのトップに登りつめたのと同じように、グリンダもクラスメイトの心を驚嘆みにし、人気者に登り詰めていくことだ。

また、そこで見えてきたのは、グリンダが自ら進んでエルファバのルームメイトになることを希望したのは、自分の心の広さを教授陣やクラスメイトに示すためだということだ。グリンダのそんな思惑から始まった、最悪な関係のエルファバとグリンダの寮生活の展開は？それが本作中盤の見どころだが、時間が経過し、さまざまな事件が起きるにつれて、意外にも2人は最悪の関係から親友へと大変身していくので、それに注目。それは一体なぜ？それが本作中盤のキモだから、それもしっかり鑑賞し、しっかり確認したい。

■□■オズの魔法使いの実態は？ヤギの教授の追放は？■□■

アドルフ・ヒトラーは第一次世界大戦でドイツが敗北したことの反省の上に、あくまで民主的な国民投票を経る中で権力を掌握していった。それに対して、オズの地に大きな熱気球でたどり着いたという、オズの魔法使い（ジェフ・ゴールドブラム）はなぜ今オズを統治し、最も偉大で恐れる存在にまで登りつめているの？

本作ではそれは明確に描かれないが、現在唯一、シズ大学で教鞭を取ることが許されている歴史学を教えているヤギのディラモンド教授（声：ピーター・ディンクレイジ）は、今オズの国では言論が抑圧され、人間とは違う言語を操る動物たちが次々と排斥されていることをエルファバやグリンダたちに教えたから、アレレ、アレレ。そして、ついにディラモンド教授まで大学から追い出されてしまったから、さらにアレレ、アレレ。エルファバはそんな事態に怒りを燃やしたが、それに同調する者は？

オズの国に君臨しているオズの魔法使いがそんな事態を知りながら許容しているとしたら、ひょっとしてオズの魔法使いは善人ではなく、ヒトラーと同じようなファシストの親玉・・・？本作中盤は、一方では某王国から編入されてきた自由気ままでハンサムな王子フィエロ（ジョナサン・ベイリー）とグリンダとの明るい恋模様が展開する一方、「これはヒトラーもの！」と思えるような、オズの国における深刻な差別と人権（動物権）抑圧と言論統制の姿がスリリングに描かれていくので、それに注目！

■□■権力の源泉は？グリムリーとは？壮大な原作にも注目！■□■

本作の前半は、後に（本作のパートⅡで）善い魔女になるグリンダと、悪い魔女になる

エルファバとの、若き日のシズ大学における反発と友情の物語だが、マダム・モリブル先生によって魔法の力が認められたエルファバが、エメラルドシティに住むオズの魔法使いの招待を受ける後半からは雰囲気さがらりと転調していくので、それに注目！

まず面白いのは、ご招待は“お一人様”だけだったのに、エメラルドシティ行きの列車が動き出す中で、突然エルファバがグリムダを列車の中に招き入れ、2人並んでエメラルドシティに入り、オズの魔法使いの前に進んでいくことだ。そこで、「招待したのは一人だけだ」などとハラの小さいことを言えば、男がすたると思ったのか、オズの魔法使いが何も言わずに2人を招き入れたのは当然だが、彼を護衛している武装したサルたちは一体何？国民に開かれ、国民に愛された指導者なら、こんな厳重な警戒は不要なのでは？そう思っていると、オズの魔法使いがエルファバに示したのは、オズの魔法使いの権力の源泉になった「グリムリー」。これは、それまで誰も読めなかった呪文を集めた古代オズの文献だが、気球に乗ってオズの国に迷い込んできた彼がなぜかそれを読めたために、彼は「オズの魔法使い」となり、オズの国の最も偉大にして恐れられる存在にのぼりつめたわけだ。また、マダム・モリブル先生は、長年の努力によって「グリムリー」の一部の呪文を読めるようになったため、オズの魔法使いからその魔法の能力を認められていたわけだ。しかし、オズの魔法使いは今回の初の“ご対面”で、エルファバにその「グリムリー」の一部を見せ、どの程度読めるかをテストしようとしたわけだが、さてその結果は？黒い服を着た魔女が箒に乗って飛んでいく姿は、某保険会社のコマーシャルでおなじみだが、そんなシーンは本作のどんな展開の中で登場してくるの？

私は1939年の映画『オズの魔法使い』を観ていないし、原作小説も読んでいないが、その主人公は、ある日、大きな竜巻に家ごと巻き込まれて、アメリカ合衆国のカンザス州の家から不思議なオズの国の中のマンチキンの国へ飛ばされてしまった少女ドロシーであることは知っている。そこで北の良い魔女が、「家に帰れる唯一の方法は、エメラルドの都に行って、壮大な魔力を持つオズの魔法使いに頼むことだ」と聞かされたドロシーが旅に出ていくところから壮大な物語が展開していくわけだ。原作がそんな壮大な物語だったことを知ると、『オズの魔法使い』が『不思議の国のアリス』（1865年）の影響を受けていることは明らかだが、そこで面白いのは、オズ王国にある東西南北4つの国とその首都であるエメラルドは、19世紀のアメリカが、東部は工業地帯のブルーカラーから青、南部は赤土やレッドネックから赤、西部はカリフォルニア州のゴールドラッシュから黄色、エメラルドの都となるワシントンD.C.は紙幣の色から緑、の4つに分割されていたことを象徴しているということだ。なるほど、なるほど。

ミュージカル『ウィキッド』も、本作も、そんな壮大な原作や映画『オズの魔法使い』の一部の物語を切り取ったものだから、本作の鑑賞を契機に、原作の壮大な物語にも興味を広げたい。

2025（令和7）年3月27日記